資料４

千葉県教育委員会への提案

明石要一（千葉敬愛短期大学）

1　小学校での「加配」教員を低学年、中学年、高学年の「主任教員」（仮称）設置に変える。例えば、低学年「主任教員」ならば 1，2 年生の教員を束ねるグループ・リダーとなる。

2　社会に開かれた教育課程を推進するには、学校と地域をつなぐ「地域連携担当教員」を置く。地域の事情をよく知った「社会教育士」の資格を持った人がよいだろう。栃木県は導入し、うまくいっている。学校が社会に開かれたほど教員が助かる、というデータがある。

3　小学校３，４年生に優秀な教員を配置する。学力の分化は３，４年生から始る。教科が増え、算数、国語の計算、漢字が急に増える。例えば、算数嫌いは３年生から始まる。学級の集団づくりは３，４年生が一番難しい。

4　準要保護者の比率が２０％以上の学校に対する支援をする。校長に人事権を与える。教育委員会は校長がチーム学校体制を作れる支援をする。

5　働き方改革を推進するには、教員の校内の分掌をハッキリさせる、必要がある。「教師の業務だが負担軽減が可能な業務」の支援体制を作る。ICT ができる業務とそうでない業務を明確にする。足立区では民間校長が教育的事務は教員がしなくてよい業務と専念して欲しい業務をわけていた。

6　幼小中の接続を明確にする。それぞれがお互いの教育課程を知らない。例えば、小学校の算数部会の教師で数学の教科書を読んでいる人は１割。中学の数学専科の教師で算数の教書を読んでいる人は３割にとどまる。

7　新卒教員の力量アップをどうするか
・初任研の宿泊合宿を多くして「同輩意識」をつくる。
・年齢の違った教員同士で「ペアー研究」を進める。例えば、2 年目教員と 30 代前半の教員のペアーグループ。
・校内の授業研究フェステバルを増やす。30 分間の模擬授業の検討をする。

8　非常勤講師と私立学校の教員も県の研修に参加できるようにする。
・講師時代に身に付けた「悪い癖」をなくすのに苦労する、という話を聞く。

9　「教育立県ちば」を一言で表現するときの、キャッチ・コピーを作る。
・香川県は「うどん県」
・大分県は「おんせん県」

・千葉県は「すし県」
教育では何か。「伸びしろ県」（ポテンシャル）、「ふるさと県」、「二幸（にこう）県」二つの幸せ（海の幸、山の幸）を育てる県、「ニューフロンティア」（新しい開拓精神県）（初富から十余三までの開拓地域名がある）。

１０　学校教育のミッションは認知能力（判断力）を育てる
地域社会のミッションは非認知能力（決断力）を育てる
学校教育の中で非認知能力を育てる可能性があるのが「特別活動」と「特別教科の道徳」である。
特別活動の抜本的な見直しを、全国初で行う。「日本型教育」育成は、特別活動が多く担っている。